

画的で、長距離・長期間にわたる大規模な動員に対応できる体制の整備を図ろうとしていたと考えられる。武器の大量集積による威圧や、突発的で、近距離・短期間の軍事活動への対応だけではなく、半島を含む遠隔地での軍事活動に対応できる、より大きな整った軍事組織の編成の必要性である。これを実現するための条件が、可能性として七観古墳の段階以降に整えられた、人格的忠誠関係に基づいた常備軍である。

さて、二〇〇〇年を前後するころから古墳に副葬・埋納される武器、とくに定型化した甲冑についてさまざまな解釈が提示されるようになった。しかし、本稿で示したように、百舌鳥・古市古墳群出現以降にみられる軍事的特徴は、軍事的な視点からすると、以上のようにきわめて合理的に説明することが可能であり、さらに、この方法によって検討を進めていきたい。



―塚口先生と訪ねる―

出雲の古代を探る旅 (二)

(会員)

古島 邦子

十月二十四日

島根県立八雲立つ風土記の丘く田和山遺跡
く宍道湖湖畔(昼食) く加茂岩倉遺跡く神
原神社古墳く荒神谷遺跡く西谷古墳群く大
念寺古墳

今日はたくさんさんの遺跡や古墳を巡るので、
お天気が心配。昨日の天気予報では雨…ホ
テルの窓を開けると降ってな〜い。よかつ
たあ♪

二十四日く二十五日の出雲地方の見学は
仁木聡先生(古代出雲歴史博物館主任学芸
員)が案内してくださいませ。何と先生は
大阪出身で私の高校の後輩です。



解説中の仁木先生

【島根県立八雲立つ風土記の丘資料館】
広い敷地の史跡公園の中にある資料館。
県内の古墳や遺跡から出土したものがわか
りやすく展示されています。
資料館では風土記の丘周辺が古代出雲の

中心地となるまでの足取りをスライドで見
た後、奈良時代の復元模型がある部屋へ行
き、整然と並ぶ出雲国庁周辺の建物や古代
山陰道や国分寺跡などを見ました。隣の部
屋では古代都市出雲国府出現までの様子が
展示されています。近くの平所遺跡から出
土の馬・家・人の埴輪がありました。目
を引いたのは「見返りの鹿」と呼ばれてい
る鹿の埴輪。そのまま連れて帰りたいほど
かわいいです。

見返りの鹿の埴輪や小六月

宮田 佐智子



芝生で覆われた公園の中には箱形石棺が
無造作に置かれたり、復元された竪穴住居
や文字の書いてある円頭大刀が発見された
岡田山一号墳や二号墳などがありました。

【田和山遺跡】

宍道湖を望む松江市南部の高台に位置す
る弥生時代の遺跡。病院の建設に伴う調査
で発見され、公園として整備されています。

公園の入口で仁木先生から遺跡の説明を
受けました。

この遺跡は三重の濠が巡っているのは集
落を守るための環濠ではなく、山頂部だけ
守るように掘られていること。山頂部には
五本柱、九本柱の遺構があつて、建物跡は
祭祀施設だと考えられており、住居施設は
環濠の外にあるそうです。

高さ三〇メートルの田和山史跡公園には
木製の階段が頂上までくねくねと続いてま
す。先生の説明にあつた環濠が山頂を囲む
ように掘られているのが確かめられました。
濠の中からは投石用の大きい石も見つかつ

ているとのこと、当たったら、大怪我しそ
うです。頂上からの景色も最高。宍道湖も
見渡せます。近くにはこの発見のきっかけ



田和山遺跡の頂上にて

となった八階建ての病院が見えます。病院の屋上から、この遺跡を見てみたいと思いました。

昼食は宍道湖畔の「皆美」で不昧公が好んだという鯛めしをいただきました。温かいごはんは鯛のそぼろ、ゆでたまご、おろし大根、のり、わさびをのせ、特製のだしをかけてサラサラと食べるものの、さっぱりとしておいしかったです。英気を養って午後の見学へ出発しました。



【加茂岩倉遺跡】

一九九六年農道整備工事中に狭い谷の南向きの急斜面から偶然発見された弥生時代の遺跡。銅鐸三十九個が二〇〇〇年の眠りから覚め出土しました。

バスの中の塚口先生の講義で『出雲国風土記』が加茂岩倉遺跡や神原神社古墳のあ

る神原郷は「御財積み置き給ひし處」と伝えられており、『古事記』や『日本書紀』に大和の石上神宮いそのかみとならぶ「神宝」の聖地として出雲のことが書かれていることなどのお話をお聞きしました。加茂岩倉遺跡の岩倉とは神が下りてくるところ、また神のついでに地名のところから銅鐸がよく出ることです。

神話に出てくるヤマトと出雲の関係も興味深かったです。

整備された遺跡に着くと、まずエレベーターで丘の上にある総合案内所の

「加茂岩倉遺跡ガイド」を訪ねました。施設内には銅鐸のレプリカや遺跡の解説パネルがわかりやすく展示されていました。窓からは銅鐸が出土した地点の全体がよく



見渡せます。

急な階段を上り下りしながら、復元された銅鐸の出土状況を見ていきます。

途中には「あぶない！まむしがいます」の看板があります。

神宝の出でし山路や秋の蛇

宮田 佐智子

発見時にショベルカーで掘った現場も再現されています。

発見された銅鐸は約四十五センチメートル大のものが二十個、約三十センチメートル大のものが十九個の合計三十九個です。「入れ子」状態で見つかっているものも、十五組あります。吊り手部分に「×」印のあるものが十四個あり、七個の銅鐸表面にはシカ・トンボ・イノシシ・カメなどの絵が描かれています。同じ鑄型を使って作られた「同範銅鐸」が近畿や四国で見つかっており、当時地域交流が盛んであったことがわかります。なぜ銅鐸は埋められたのか？



加茂岩倉遺跡

銅鐸を用いないまつりや新しいシンボルを作ったのではないか？ということですが、仁木先生の解説現場でお聞きして、よくわかりました。

次の見学地「景初三年」の年号のある鏡が発見された神原神社古墳へ向かいました。
(つづく)

斑鳩に救世観音在す千代の春

宮田 佐智子

牛乗り天神



二月例会

二月十四日(土) 午後二時より

会場 豊中市教育センター

「五世紀のヤマト政権と播磨」

兵庫県立博物館主任専門員

山本 三郎先生

*二月の現地見学はお休みです。

編集後記

お陰さまで、当会も創立二十周年の節目を迎え、小誌も二五一号と新たな一步を踏み出すことになりました。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

昨秋、法華経の翻訳で毎日出版文化賞を受けられた植木雅俊氏が、『凶書』(七一八号 二〇〇八年、岩波書店)に、本業の物理学のかたわらに行っている仏教学の勉強を続ける力を得たという、恩師中村元先生の言葉を紹介しておられます。

「人生において遅いとか早いとかいうことはございません。思いついた時、気がついた時、その時が常にスタートですよ」

実に励まされる言葉ではありませんか。

<http://homepage2.nifty.com/toyonakareki shi/>